

高知県近世社寺建築の調査

建造物研究室

昭和52年度から始まった近世社寺建築の緊急調査は本年度で4年目となる。当研究所は岡山県・山口県・香川県に次いで高知県を担当した。事業主体は高知県教育委員会である。調査はまず県下各市町村教育委員会の予備調査に基づいて、県内在住の調査員が一次調査を担当し、建物の概況、建立資料、境内地物の調査、略配置図の作成、写真撮影等を行なった。当研究所は二次調査を担当し、一次調査表の中から79件109棟を選んで現地調査を行なった。

調査件数・棟数

	神 社		寺 院		計	
	件 数	棟 数	件 数	棟 数	件 数	棟 数
予備調査	315	417	79	94	394	511
一次調査	204	310	52	69	256	379
二次調査	52	70	27	39	79	109

土佐国は近世を通じて山内氏の支配下にあったが、初代藩主一豊によって社寺の統廃合が行なわれたことによって、近世宗教界の大筋が規定された。そのため「長曾我部地検帳」(天正年間)の神社数約3000、寺院数約2000に対して、「土佐洲郡志」(宝永年間)では神社約2700、寺院約900に減じている。このように寺院はもともと少なかったのに加えて、明治初年の廃仏毀釈が徹底して行なわれ、幕末時の寺院数約600に対してその約8割が廃寺となった。さらに加えて、当県は度重なる風水害等の厳しい自然環境下にあり、社寺建築の保存に大きな影響を及ぼしている。二次調査109棟の年代別内訳は17世紀5棟・18世紀20棟で他は19世紀以降のもので、初期のものはごく僅かしか残されていない。

二代藩主忠義の社寺建立・修築の事蹟は名高く、治政約60年間に120件以上が知られている(「山内家史料」)。現在重要文化財に指定を受けている県下の近世社寺建築4棟はいずれも忠義の時代に属するほか、調査の結果、忠義の建立になることが明らかで現存するものとして土佐神社楼門(高知市・寛永8年)と芳原観音堂(春野町・慶安元年)の2棟を確認した。17世紀の遺構としては他に土佐神社西御前社(寛文10年)・金林寺薬師堂(馬路村・貞享4年)があり、八坂神社本殿(鏡村)は年代不明ながらこの時期に属すると考えられる。

本殿形式別調査棟数

神社建築では本殿51棟・拝殿15棟・他4棟を調査した。本殿は流造が多くを占め、全県下に普遍的に分布している。土佐湾岸の平野部では入母屋造平入・同妻入・春日造が混在している。17・18世紀に属する本殿はいずれも流造である。流造は19世紀にも比較のおとなしい意匠とするのに対して、他の本殿形式では組物・腰組等を賑やかに作る傾向がみられる。一間社が主流を占める当県にあって、平野部では三間社が比較的多い点も特色であり、高知城下を中心とする平野部での造営の活力を物語っている。このことは仏堂についても言え、

構 造 形 式	一次調査	二次調査	
流 造	一間社	112	16
	二間社	6	3
	三間社	23	8
入母屋造 平入	一間社	19	7
	三間社	6	4
入母屋造 妻入	一間社	14	7
	三間社	1	1
春 日 造	一間社	14	4
そ の 他	8	1	
計	203	51	

平野部では円柱を用いた本格的なものが多いのに対して、山間部では角柱を用いて組物は舟肘木程度とし、軒は一軒疎垂木とする簡素なものが多い。

拜殿は平入が圧倒的に多く、吾川郡北部で妻入が集中しているのは注目され、この地域では仏堂でも妻入が多い。平入の場合はほとんどが横長の拜殿後方に幣殿を接属した凸型平面になるが、地域ごとに特色がみられる。屋根は入母屋造が主流であるが高知市近隣では切妻造を多く見受ける。香美郡南部・南国市では入母屋造の正面に発達した向拝を設け縁を巡らすなど一見仏堂風の拜殿と、桁行・梁間ともに全長に胴差を渡して中の柱を管柱とする拜殿とが混在している。高岡郡では拜殿梁間を狭く採り、梁行に虹梁を架し、正背面中央間の柱のみ太い円柱を使用している。幡多郡では総角柱で簡単な向拝のついた形式が多い。

凸型拜殿以外には神楽用拜殿と十字形拜殿とがある。神楽用拜殿は吾川郡北部に多く、拜殿内部に太い四天柱を建てて神楽奉納の場とし、四周を棧敷とする。楽屋を拜殿左右に設けて平入とする場合と、後方に設けて妻入とするものがある。土佐神社拜殿（重文・元亀2年）のような十字形拜殿は県下でも希であり、小村神社（日高村・安政6年）・若宮八幡宮（高知市・明治16年）の2棟があるにすぎない。土佐神社に較べて屋根勾配が強く、左右翼殿が短かいことなど、たちの高さが強調されて年代的隔たりをみせる。

寺院建築では仏堂27棟・門5棟・他4棟を調査した。仏堂は和様系がほとんどで、他は禅宗様・方丈形式各1棟、浄土系3棟にすぎない。和様系仏堂は三間堂がほとんどであり、金剛福寺本堂（土佐清水市・明治13年）は時代は新しいが、身舎・庇構成の古式を伝える大型五間堂として重要である。三間堂では前掲の芳原観音堂・金林寺薬師堂に次いで竹林寺虚空蔵菩薩堂（高知市・18世紀初）が古く、内外陣の二室構成を採る。長岡郡から吾川郡にかけての山間部で流布したと思われるものに二間堂がある。正面は一間または三間とし、背側面を二間とするもので平面は4m四方と一定している。畳割による平面計画に基づいて発生した形式かと思われる。

仏堂以外には近世建築は少なく、札所に代表される境内の整った寺院においても明治以降の建立になるものが多いが、竹林寺客殿（高知市・19世紀初）・青竜寺客殿（土佐市・嘉永5年）は規模も大きく、寺の沿革等からみると当時としても屈指の客殿であったと考えられる。

（清水 真一）

土佐神社楼門